

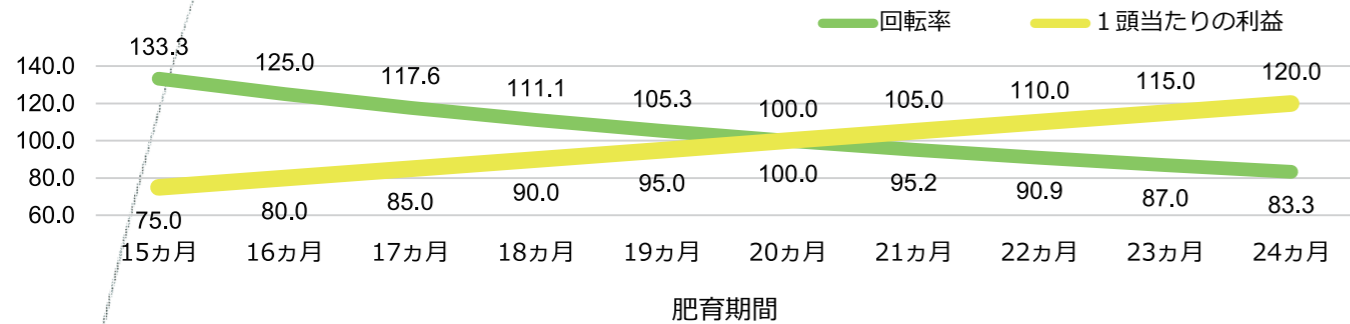
肥育期間の短縮

肥育期間の短縮で1頭当たりの利益が多くなるんだ！
 「持続可能な牛肉生産」には、「遺伝的多様性の維持・拡大」、「繁殖性・飼料利用性の向上」、「肥育期間の短縮」が必須だね。



肥育期間（出荷月齢）の短縮

20カ月の肥育期間で得られる利益を基準に、一定の期間の利益が同等になる、「回転率」と「1頭当たりの利益」の関係



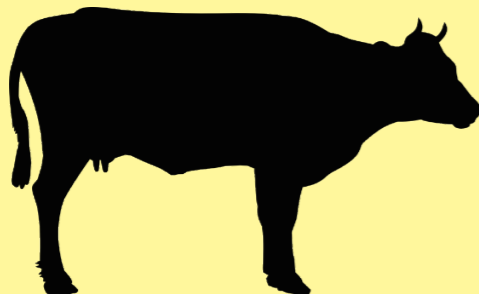
肥育期間を短縮することにより、回転率のアップでトータルでは儲かるかもしれない?? □例えば、現状の20カ月の肥育期間を2ヵ月短縮すると、回転率が11.1%アップするので、1頭当たりの利益ダウンを10%未満に抑えられるとトータルで儲けが増えます。上の図はそうした関係を示しています。さらに肥育期間の短縮により、維持エネルギーが小さくなるので、飼料摂取量の抑制にもつながるかもしれません。鹿児島全共の出品牛は24ヵ月未だで出荷されており、通常の肥育牛よりも約半年ほど短く、持続可能なこれからの牛肉生産の姿を示しているかもしれませんね。

コラム

環境にやさしい…だけじゃない

温室効果ガスの排出を減らすために、新たな飼料や排せつ物管理技術の開発が行われていますが、育種改良によっても排出量を抑えることができる可能性があることがわかってきました。最新の研究によれば、メタンおよび窒素の予測排出量の遺伝率は0.5~0.6と推定され、遺伝的改良の余地が十分にあることが示されました。また、これらの排出量の育種価と余剰飼料摂取量の育種価との正の相関も示され、無駄食いの少ない**生産効率の良い牛は環境への負荷も少ない**ことがわかりました。

13 気候変動に具体的な対策を



SDGsへの関心の高まりから、消費者は環境に配慮した畜産物に付加価値を見出すことが考えられます。環境負荷の小ささは、生産効率が向上し、消費者に満足感を与えられる、新たな改良指標の一つとして期待できます。



「持続可能な牛肉生産に向けて」

和牛にはもともと多様な能力が備わっています。例えば、草資源をエネルギーに変える能力、1年1産する能力、早熟早肥の能力も備えています。生産資材高騰の厳しい環境の中で、今一度、和牛の持っている素晴らしい能力を見直してみませんか？



私は第12回全共鹿児島大会
 マスコットキャラクター
 「かごうしママ」です。

令和4年10月

【監修】公益社団法人全国和牛登録協会
 一般社団法人全国肉用牛振興基金協会
 (令和4年度和牛肉の新価値観構築事業)

遺伝的多様性の重要性

今後も継続して和牛を飼育するためには、遺伝的多様性の維持・拡大が重要だね。



和牛は、昭和19年に我が国固有の肉用品種として成立されてから、国内の遺伝資源だけで育種・改良が進められています。

したがって、和牛は国内で維持・改良をしていく必要があります。時代や消費者のニーズに応じた牛肉生産を行っていく上でも様々な遺伝資源の確保（遺伝的多様性）が必要不可欠です。一方、遺伝的多様性の一つの指標となる近交係数は、年々上昇していることから、遺伝的多様性の低下が危惧され、今後は維持・拡大が重要になります。

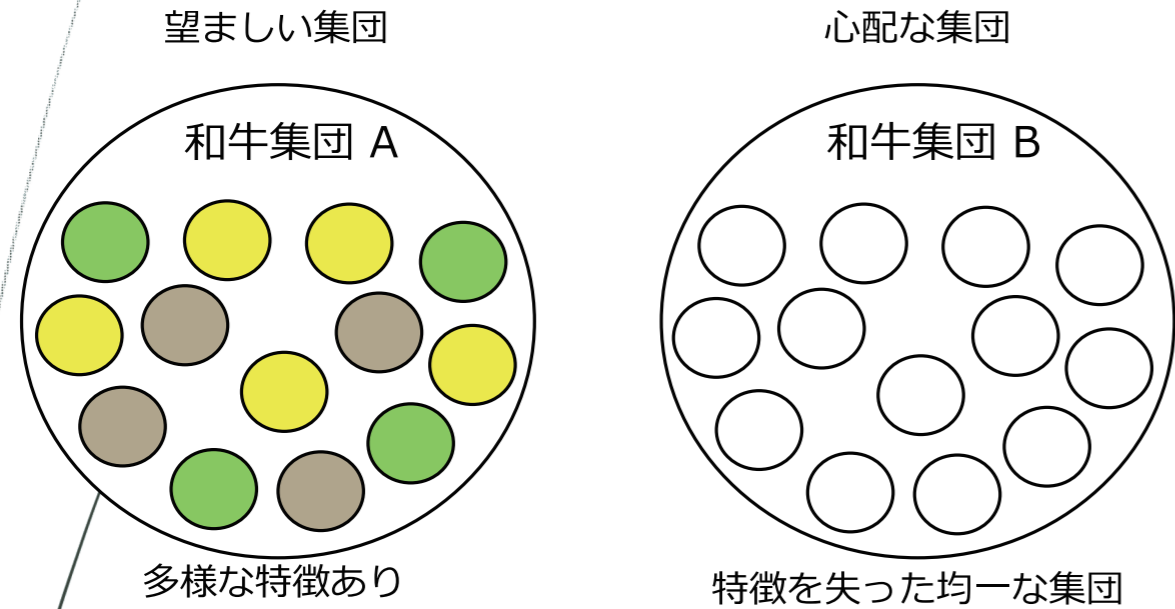


図 遺伝的多様性の重要性

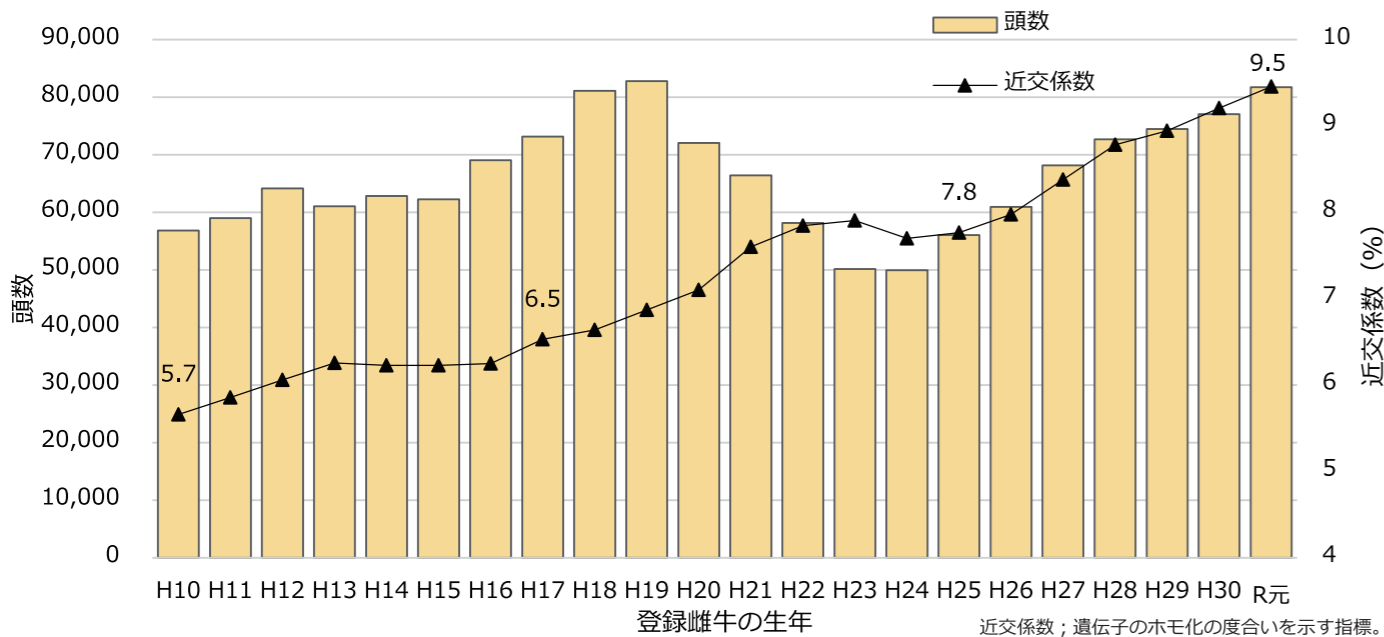


図 和牛集団の近交係数と頭数の年次別推移

繁殖性・飼料利用性等の生産性の向上

分娩間隔短縮で子牛の生産頭数を増加し、飼料利用性の活用によって肥育牛の無駄喰いを抑えることが大切だね。



繁殖性（分娩間隔の短縮）の向上

和牛は、親が子を産むことによって牛肉生産が行われています。第12回全国和牛能力共進会では、400日以内を目標にしており、あと少しで達成できるレベルとなっています。今後は、さらに短縮するため1年1産（365日以内）を目標に掲げていきます。

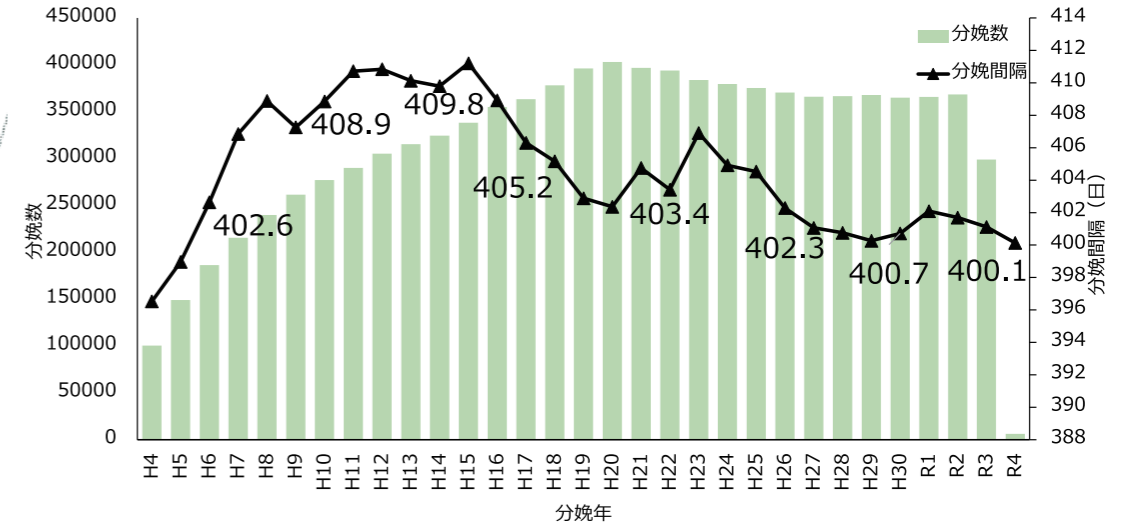


図 (平均) 分娩間隔と分娩数の年次推移

飼料利用性（余剰飼料摂取量）の向上

【引用：A県現場後代検定調査牛(H27～R4年出荷分)の飼料給与情報、農林水産省調べ「農業経営統計調査 令和2年度肉用牛生産費」】

肥育牛は出荷されるまでに、平均で578日間に濃厚飼料を4,854 kg、粗飼料を1,759 kg摂取します。これは1日当たりで換算すると濃厚飼料で8.4 kg、粗飼料で3.0 kgとなります。肥育牛1頭あたりの生産費は約130万円で、その内、飼料費の割合は約25%と大きく、生産コストの低減には飼料利用性を高めることが必要です。下図のAの方が増体が良いものの、AはBと比較して、必要とする飼料量よりも多く摂取しているため、飼料の無駄喰いが多いこととなります。



飼料の利用性が悪い

導入時体重300kg、出荷体重800kg、
増体量500kg
必要な濃厚飼料の量 **4,600kg**
実際に摂取した量 **5,100kg**

必要量より **500kg** 多い



飼料の利用性が良い

導入時体重280kg、出荷体重740kg、
増体量460kg
必要な濃厚飼料の量 **4,400kg**
実際に摂取した量 **3,900kg**

必要量より **500kg** 少ない

図 飼料利用性の概要